

# テロになるまで待てない

中 相作

ぼやき漫才リターンズ

「おらおらおらおら」

「なんですねん出てくる早々」

「おらおらおらおらあッ」

「せやからどないしたんですか大きな声で」

「怒号といえますか罵声といえますか」

「なんでいきなり怒鳴らなあきませんねん」

「きょうの漫才はおらおら路線となっておりました」

「どんな路線ですねんそれ」

「先日公開された北野武監督の『アウトレイジ』みたいな感じでしょうか」

「君あの映画もう観たんですか」

「予告篇だけは完璧に」

「それでは観たことになりませんがな」

「椎名桔平さんもおらおら路線全開の熱演でした」

「そらそうゆう役でしょうからね」

「ですから僕も桔平さんみたいになりたいなと」

「無理ゆうたらあきませんがな」

「たしかにかなりの無理はあるんですけど」

「わかっているのやったら潔く諦めたらどうですか」

「しかし気合を入れることも必要です」

「なんで気合が必要すねん」

「なにしろ僕らが『伊賀百筆』で漫才やらしてもら

のは六年ぶりのこととして」

「あれからもう六年ですか」

「忘れもしない二〇〇四年のことでした」

「三重県が伊賀地域で官民合同事業をやりましてね」

「『生誕二六〇年芭蕉さんが行く秘蔵のくに伊賀の蔵

びらき』ゆうあほみたいな名前の事業でしたけど」

「あほみたいなゆうたらあきませんがな」

「けど事業の関係者全員があほでしたから」

「そんなことゆうてたらあかんゆうのに」

「もちろん僕かて伊賀地域住民全員があほであるとゆうてるわけではないんです」

「そんなこといえるわけありませんがな」

「ところが伊賀の蔵びらき事業の場合は関係者全員が見事なまでのあほでしてね」

「あほあほゆうなゆうてますねん」

「でもげんにみんながあほやったせいで事業は目もあてられんほどの大失敗に終わってしまいました」

「たしかにいろいろ問題があつたみたいですけど」

「ですからあの年に出た『伊賀百筆』第十三号」

「この雑誌で初めて漫才やらしてもらいましたね」

「事業に携わっていた官民双方のあほを漫才でええだけ叱り飛ばしたつたわけですけど」

「君なんでそこまで偉そうやねん」

「不思議ふしぎあら不思議」

「どないしました」

「関係者の誰ひとりとして僕のゆうことを聞つきよりませんでした」

「君が誰からも相手にされてないゆうことですがな」

「僕はまともなことしかゆうてなかつたんですけど」

「君の考えがそのまま関係者に受け入れられるとはかぎりませんからね」

「聞く耳をもたないゆうのがそもそもあほの証拠なんです」

「そんな決めつけるようなことゆうたらあかんがな」

「ですから前回以上の気合をこめて叱り飛ばしたらなどんならんなと決意をいたしました」

「漫才やるのに決意が要るんですか」

「おらおらおらおらおらおらおらおらあッ」

「やかましいだけやないか」

「とにかく椎名桔平さんみたいになりたいなど」

「無理やゆうてますやろ」

「いずれにしても万感こもこもこの胸に秘めながらひさびさの高座に立つてるわけなんです」

「漫才やるのはほんまにひさしぶりですからね」

「最後にやったのは三年前のことになります」

「どんな漫才でした」

「二〇〇七年の七月に僕は名張市の監査委員に住民監査請求を提出したんですけど」

「そうゆうたら君また例によつてあほなことやつてましたな」

「あほ相手にあほなことやつてほんまにあほみたいな話なんですけど」

「すぐにあほあほゆう癖なんかかなりませんか」

「監査請求の参考資料として提出した『僕の住民監査請求』ゆうのが僕らの最後の漫才でした」

「長い漫才でしたねあれは」

「いまでもインターネット上にありますからタイトルで検索してもろたらいつでもお読みいただけます」

「あれインターネットに発表したんですか」

「そうゆう時代ですからね」

「いまやインターネット全盛ですから」

「とにかく紙媒体の舞台が激減してますからね」

「紙媒体の舞台ゆうたら雑誌のことですか」

「雑誌の休刊廃刊があいついでます」

「これも時代の流れですかね」

「僕らの初舞台は『四季どんぶらこ』ゆうとこやったんですけど」

「名張市で発行されてた地域雑誌ですね」

「僕らの漫才は面白くてためになると大評判で」

「どのへんがためになるんですか」

「ところがしばらく前に廃刊になったうえ」

「まだなんかありましたか」

「『四季どんぶらこ』の編集兼発行人やった川上弘子さんがお亡くなりになりました」

「そうでした。去年六月のことでしたか」

「あらためてご冥福をお祈りしたいと思います」

「僕らもずいぶん可愛がっていただきました」

「それで僕らはホームグラウンドを失ってしまったわけなんです」

「定期的に漫才やる舞台がなくなりました」

「ところが今回『伊賀百筆』の舞台にふたたびお招きをいただきまして」

「ありがたいことですねほんま」

「こうなりますと気になることはただひとつ」

「なんですねん」

「『伊賀百筆』はいつまでもつのか」

「そんな不吉なこと気にしたらあかんがな」

「でも地域に根ざした雑誌というのは地域社会にぜひとも必要なものですから」

「いくらインターネットの時代になったゆうてもね」

「地域雑誌『伊賀百筆』のますますのご発展を心からお祈り申しあげまして」

「なんの挨拶ですねん」

「帰ってきたばやし漫才の挨拶といたします」

「またえらい行儀のええ出だしですけど」

「おらおらおらおらおらおらおらおらあッ」

「それはええねん」

## 人われをだあほと呼ぶ

「さて今回の漫才のテーマは何か」

「まだ決まってもせんのか」

「編集部からはこちらで江戸川乱歩騒動のことを記録しといたらどうやお話をいただいでるんですけど」

「江戸川乱歩騒動といいますと」

「名張市に乱歩の生誕地碑がありまして」

「ちよつと前に広場として整備されましたけど」

「以前は榊田医院第二病棟ゆうのが建つてました」

「その中庭に生誕地碑があつたわけですね」

「その病棟の土地と建物が所有者である榊田敏明先生のご遺族から名張市に寄贈されました」

「乱歩のために活用してくださいゆうことで」

「ところが結局はあのだあほです」

「ざまゆうこともないでしょうけど」

「僕ときどき人から怒られますからね」

「なんちゆうて怒られるんですか」

「だあほッ。このだあほッ」

「そらまあたしかにどあほでしょうけど」

「名張市におまえがついていながらなんであんなことになつてもたんや」

「つまり君が役立たずやったゆうて怒られると」

「だあほッ。このだあほッ」

「それはわかりましたから」

「たしかにあの榊田医院第二病棟跡地活用事業は目もあてられんほどの大失敗に終わりました」

「目もあてられんことが多いんですな」

「なかには広場として整備されたことを高く評価する名張市民もいますけどね」

「どんな評価があるんですか」

「さつぱりしてよかつたですわて」

「そら閉鎖された古い病棟が建つてるよりは広場のほうがさつぱりしますけど」

「でもこれはさつぱりするとかせんとかさうゆうレベルの問題ではないですから」

「名張市が寄贈していただいた乱歩ゆかりの場所をどう活用するかという問題です」

「それが大失敗に終わつてしまいましたので」

「少なくとも大成功とはいえないでしょうね」

「せめて大失敗の経緯をつぶさに記録しといたらどうやというのが編集部の意向なんです」

「そしたらそれがきょうの漫才のテーマですか」

「ところがひとつ悩ましい問題がありました」

「なんですねん」

「どこから話を始めるべきかが悩ましい」

「どうゆうことですか」

「いろいろな事情が重なってますからね」

「いろいろな事情といえますと」

「榊田医院第二病棟の跡地整備は名張市のまちなか再生事業の一環として進められたわけです」

「あの事業もなんやわけのわからんままうやむやになつてしまいましたけど」

「目もあてられない大失敗に終わってしまいました」

「たしかに目もあてられない感じですね」

「二〇〇五年に名張市がまちなか再生委員会ゆうのを発足させまして」

「いわゆる官民協働組織ですな」

「さあまちなかの再生を進めましようゆうことになつたんですけどこれが迷走に次ぐ迷走で」

「君が提出した住民監査請求もまちなか再生事業からみのことでした」

「そうです。聞いたこともないような民間団体が三重大学のなんとか研究室と委託契約を結んでまして」

「ところがその研究の対価約百五十万円が名張市民の税金から支払われてたわけですね」

「ですからそらちよっとおかしいやろと」

「監査委員に監査をお願いしたわけですね」

「ところが監査の結果は驚くべきものでした」

「どんな結果やつたんですか」

「なんの問題もありませんゆうよなことでした」

「えッ」

「協働だからいいんですみたいなことでした」

「えーッ」

「目を疑うような結果が返ってきましたね」

「それはちよっとおかしいのところがいますか」

「明らかにおかしいんですけどあの事業に関してはまだまだいっばいおかしなことがあります」

「再生委員会自体もおかしなことになりましたし」

「官民協働組織である再生委員会から名張市が脱退してしまうという異常事態に発展しました」

「去年の秋のことでしたけど」

「名張市が発足させた組織を名張市が解散させるゆうのやつたらまだわかるんです」

「解散やなしに名張市が自分から引いたんですから」

「ようそこまで主体性を放棄できたもんですね」

「感心しとる場合やないと思いますけど」

「だあほッ。このだあほッ」

「どあほは君やないか」

「ですから榊田医院第二病棟跡地活用事業の大失敗について語ろうと思っただらまちなか再生事業の大失敗についても語らなければならぬわけなんです」

「しかもそれだけやないんです」

「まだなんぞあるんですか」

「伊賀の蔵びらき事業」

「あの事業にも関係があるんですか」

「官民合同とか協働とかお役所があほなことを前面に押し立て始めたのがだいたいあのあたりですから」

「べつに悪いことやないと思いますけど」

「きれいごとの理念だけ見たらそう思いますけど」

「実際には違うんですか」

「官民の協働ゆうやつには法則がありました」

「どんな法則ですか」

「あほはあほとしかつるまない」

「君ほんましまいに叱られるで」

「けど事実が証明してますから」

「事実といえますと」

「たとえば伊賀の蔵びらき事業では三重県という官のあほが伊賀地域住民という民のあほを総動員したあげく見事にこけてしまいましたからね」

「こけたゆうてもいろいろ事業はありましたかな」

「ひとりよがりなご町内イベントをひたすら寄せ集めただけゆうのがあの事業の実態でした」

「たしかにその場かぎりのイベントが多かったみたいですけど」

「まちなか再生事業かて官民双方のあほがつるんで大失敗の道をたどったゆうのが基本的な構図でしたし」

「基本的な構図はいっしょやったゆうことですか」

「官民協働の悪しき構図が伊賀の蔵びらきからまちなか再生へしつかり受け継がれていたわけですよ」

「それ漫才にするとなつたらえらいことですがな」

「そもそも榊田医院第二病棟跡地活用事業の大失敗について語ろうと思っただらまちなか再生事業の大失敗について語るとともに伊賀の蔵びらき事業の大失敗についても語らなければならぬわけなんです」

「大失敗だらけですがな」

「けどいくら語っても意味がないような気もしてきますしね」

「なんでですな」

「関係者の誰ひとりとして僕のゆうこと聞つきよりませんから」

「それは君が嫌われ者やゆうことですがな」

